

新聞 4 コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（後編-2）

首相在任期間中の 3 大紙の 4 コマ漫画に関する一分析 2009~2010

Prime Minister Yukio Hatoyama in Newspaper Comic Strips (Part 4): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2009-2010

水野剛也・福田朋実

Takeya MIZUNO and Tomomi FUKUDA

はじめに 前編・中編・後編-1 の要約と後編-2 のねらい

本論文は、鳩山由紀夫首相の在任期間中（2009年9月16日～2010年6月8日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌第50巻・第1号（2012年12月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

それをふまえ、第50巻・第2号（2013年3月）に掲載した中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を、さらに第51巻・第1号（2014年1月）に掲載した後編-1では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）を質的に分析した。

本号に掲載する後編-2では、『朝日新聞』の「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析する。なお、紙幅制限によりすべてを掲載し切れないので、分析の一部は次号にくり延べる。

次号に掲載する予定の結論では、「地球防衛家のヒトビト」の分析を完了した上で、それまでの分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌第50巻・第1号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌第50巻・第1号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く鳩山首相

- ・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』 (朝刊)
- ・ウチの場合は (森下裕美) 『毎日新聞』 (夕刊) 本誌第50巻・第2号 (中編) に掲載。
- ・コボちゃん (植田まさし) 『読売新聞』 (朝刊)

- ・ののちゃん (いしいひさいち) 『朝日新聞』 (朝刊) 本誌第51巻・第1号 (後編-1) に掲載。

・地球防衛家のヒトビト (しりあがり寿) 『朝日新聞』 (夕刊)

『朝日新聞』の夕刊で連載されている「地球防衛家のヒトビト」(しりあがり寿)は、家庭的な要素を多分に含みながらも旺盛な時事性・風刺性を特徴とする4コマ漫画である。「地球防衛家」は、会社員の父親・トーサン、専業主婦の母親・カーサン、会社員の長女・ムスメ、小学生の長男・ムスコからなる4人家族で、作者自身の説明によれば、「フツの生活を送りながらも、世の中をよくしたいと正義感に燃える、いわばどこにでもいるような家族」である。彼ら以外にも、近所の人々、会社の上司や同僚、学校の先生や同級生、皮肉屋の「カエル」など、多彩なキャラクターが登場する。後述するように、首相も頻繁に登場し、常連の1人だといっても過言ではない。連載がはじまったのは小泉純一郎政権時の2002年4月で、2012年4月に10周年を迎え、本論文執筆時点(2013年11月)でもなお継続中である。⁴³

後述するように、首相は「地球防衛家のヒトビト」に頻繁に登場し、常連のキャラクターといってもいいほどである。連載10周年を迎える直前の2012年3月、過去の作品を1年ごとにふり返る特集記事が『朝日新聞』に掲載された際にも、再掲された代表作10本のうち2本に首相(小泉純一郎と安倍晋三[第1次、以下略])が登場している。「地球防衛家のヒトビト」にとって首相が定番の題材であることがわかる。⁴⁴

作者のしりあがり寿(本名・望月^{としき}寿城)は、新聞4コマ漫画に限らず多領域で活躍している漫画家である。1958年に静岡県静岡市で生まれたしりあがりは、1981年に多摩美術大学を卒業後、ビール会社に勤めながら漫画を執筆・発表しつづけた。1994年に退職後は漫画家業に専念している。他の代表作に、『流星課長』(竹書房、1996年)、『ヒゲのOL 薮内笹子』(竹書房、1996年)、『時事おやじ2000』(アスキー、2000年)、『弥次喜多 in DEEP』(エンターブレイン、2000年)、などがある。2011年3月の東日本大震災に際しては、直後から関連する諸問題を積極的に漫画化し、作品集『あの日からのマンガ』(エンターブレイン、2011年)や『ゲロゲロボースカ』新装版(エンターブレイン、2012年)などを出版している。また、自身の仕事について論じた『表現したい人のためのマンガ入門』(講談社現代新書、2006年)やエッセー集『人並みといふこと』(大和書房、2008年)など、漫画以外の著作も複数ある。第46回文藝春秋漫画賞(2000年)、第5回手塚治虫文化賞マンガ優秀賞(2001年)、第15回文化庁メディア芸術祭優秀賞(2011年)などの受賞歴、そして神戸芸術工科大学などで教歴もある。⁴⁵

鳩山の在任期間中、3大全国紙の4コマ漫画のなかでもっとも多く首相を描いたのが「地球防衛家のヒトビト」であった。頻度・本数（5.31%＝207本中11本）とも、「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）のそれ（2.70%＝259本中7本）を大きく上回り、頻度では2倍近く、本数でも1.5倍以上引き離している。単純に計算すれば1ヵ月に少なくとも1度は首相を描いていることになり、既述のとおり常連の登場人物だといっても過言ではない。「アサッテ君」とともに、先行研究が「時事的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分にうなずける。他方、残る3つの家庭的4コマ漫画で首相を描いているのは「ののちゃん」（『朝日新聞』朝刊）だけ、しかも1本（本論文後編-1・図11）にすぎず、その差は歴然としている。⁴⁶

首相を描くことに対する「地球防衛家のヒトビト」の積極性は先行研究もくり返し指摘しているが、その特徴は鳩山の在任期間中によりいっそう顕著になっている。過去の首相とは在任期間が異なるため頻度を比較すると、小泉純一郎は3.10%（1,320本中41本）、安倍晋三は3.72%（295本中11本）、福田康夫は2.72%（294本中8本）、麻生太郎は4.86%（288本中14本）の作品で描かれており、鳩山の5.31%（207本中11本）は他の誰よりも高い。連載開始以来、どの首相も比較的に高い頻度で取りあげられているが、なかでも鳩山がもっとも「描かれやすい」首相であったことがわかる。鳩山の「描かれやすさ」は、本論文の中編で指摘したように「アサッテ君」でも認められた。衆院選で自民党を破り劇的な政権交代をはたしたものの、沖縄県普天間にあるアメリカ軍飛行場の移設問題や献金疑惑などで早々につまずき、結局わずか8ヵ月あまりで退陣してしまった。その「落差」の大きさが両時事漫画にとって鳩山を「描かれやすい」首相にした有力な要因だと考えられる。追加的に、3大紙の4コマ漫画のなかで「地球防衛家のヒトビト」だけが首相に就任する以前から鳩山を描いている。この点はあらためて詳説する。また、同じ時事漫画でも、先行研究は「アサッテ君」を「世論反映型」、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」と区別して特徴づけているが、この点についても後述する。⁴⁷

次に、鳩山を描いた作品の質的な分析に移るが、そこで有用なのが小泉から麻生までの作品分析で先行研究が採用している準拠枠である。それによれば、「地球防衛家のヒトビト」は「自己主張型」の時事的4コマ漫画であり、首相の描き方のもっとも根本的な特徴は、首相の実際の言動や政策を主題とし、かつ強烈な風刺・批判を浴びせる、という点であった。この旺盛な時事性と風刺性を下地としていくつかの表現パターンが見られたが、鳩山の作品を分析する上でも、先行研究が見いだした以下の諸点は引きつづき有効である。

- 1 地球防衛家の面々をはじめ一般庶民に首相を語らせる。
- 2 他の政治家（海外の政治家も含む）と対比・並列して首相を描く。
- 3 非現実的な架空の舞台を設定し、そこに滑稽な人物として首相を登場させる。
- 4 作者自身のナレーションにより首相を風刺・批判する。



図13 2009年10月29日号

以後、作品の分析は上述の諸点を軸にすすめる。なお、「地球防衛家のヒトビト」では1本の作品に複数の表現パターンが混在している場合が多く、「アサツテ君」ほどはっきりとは類型化しにくい点をあわせて指摘しておく。

まず、現実としてあった首相の言動や政策をテーマに何らかの政治的風刺・批判を展開している点は、程度の差こそあれ、鳩山を描いた11本すべてに通底する基本的な特徴として重要である。所信表明演説をする首相を描いた2009年10月29日号(図13)の作品は、その特徴を如実に示している。首相はこの3日前の10月26日に国会で実際に演説をおこない、そのなかで自身が理想として掲げる「友愛社会」の実現を訴えていた。作品はその「友愛社会」の観念的な曖昧さを皮肉る内容で、「お金よりも人が大切!!」「一生けん命働けば誰もが…」「給料のかわりに友愛をもらえる」(3~4コマ)と喜ぶトースンを、カーサンが「そりゃマズイだろ…」(4コマ)とたしなめている。以下で取りあげる他の作品にはこれよりもはるかに辛辣なものがあるが、首相の実際の言動を題材に政治的風刺・批判を試みていることは間違いない。また、政権初期のいまだ支持率の高い段階にもかかわらず(2009年10月の内閣支持率は朝日新聞社の世論調査で65%、本論文前編・表8参照)、すでに首相に懐疑的な目をむけていることから、「地球防衛家のヒトビト」が旺盛な時事性と風刺性をそなえた漫画であることがわかる。

同時に、図13には一般庶民が首相を語る第1の表現パターンが見られるが、「地球防衛家のヒトビト」では主人公一家をはじめ市井の市民が実に饒舌に首相について論評する。この特徴は、首相を描いた作品に限らず、「地球防衛家のヒトビト」全体に見られる独自性の1つである。この

点について漫画史研究者の清水勲は2009年の著書のなかで、「この作品は複雑多様化した現代の世相や政治を諷刺するためにセリフを多用し、成功している。現在、最も活力に満ちた新聞四コマの一つである」と評している。実際、首相を描いた11本のなかでも、地球防衛家の人々が登場しない作品は1本(「カエル」が登場する2009年11月6日号=図23)しかない。⁴⁸

なお、図13で登場人物はテレビの報道をきっかけに首相について語っているが(1コマ)、マス・



図15 2010年6月7日号

- ・こんなになんて総理がかわるなんて…日本にはそもそも総理をできる人がいないのか？ (1コマ)
- ・それとも選挙めあてにカンタンに頭をすげかえる党が悪いのか… (2コマ)
- ・はたまた失点ばかりをあげつらって騒ぎたてるマスコミや国民が悪いのか… (3コマ)

鳩山はこの作品が掲載される5日前(6月2日)に突如として辞任する意思を表明していた。自民党の3人の首相(安倍・福田・麻生)につづき、政権交代をなし遂げた民主党の鳩山までもが1年もたずに退陣したことに對し、率直に苦言を呈する内容である。したがって、1コマ目の「どんどん総理がかわる」の「総理」が鳩山を意味していることは間違いないが、同時にそれ以前の自民党の首相たち、また次期首相となる菅直人をも含意している点は留意しておくべきである。

このような作品は、最高権力者である首相の言動をあえて社会的地位では対極にある「子供」の立場からとらえることで、政治的な批評性・風刺性をいっそう強めていると考えられる。図15の最後の「雲よー教えてくれー」(4コマ)も、政治的にはほぼ無力な子供の突飛な問いかけを描くことで、一国の指導者が次々に交代する政治状況に対する一般庶民の無力感・失望感をより効果的に表現していると思われる。安倍・福田の任期中にはそれほど顕著でなかったが、小泉・麻生政権時にもムスコたちが首相を鋭く批判する作品が複数あった。「地球防衛家のヒトビト」では、小学生を含め老若男女が実に積極的に首相を批評・風刺する。

つづいて、他の政治家(海外の政治家も含む)と対比・並列して首相を描く第2の表現パターンも、4本の作品で認められた。先行研究が指摘しているように、小泉・安倍・福田の在任期間中は、この描き方は「地球防衛家のヒトビト」だけで採用される独自の手法であった。しかし、つづく麻生と鳩山の在任期間中には、それぞれ1本だけではあるが、「アサッテ君」にも他の政治家と対比させて首相を描く作品(本論文中編・図6)が見られた。また、既述のとおり、「ののちゃん」でも鳩山と小沢一郎を描く作品(本論文後編-1・図11)があっ



図17 2010年6月5日号



図18 2009年12月8日号

ある。この漫画が描く「首相」は、必ずしも現職にとどまらない。だからこそ、より長い時間枠で継続的に研究をかさねていく必要がある。なお、鳩山自身も首相に就任する以前、つまり麻生政権時から複数の作品で描かれているが、この点はあらためて後述する。⁴⁹

もう1つ、より具体的な政策を題材にして第2の表現パターンを用いているのが2009年12月8日号(図18)の作品である。ここではオバマ大統領に加えて、民主党と連立政権を組んでいた社民党の福

島瑞穂党首（消費者・少子化担当相）を登場させることで、沖縄県にあるアメリカ軍飛行場の移設問題で両者の板挟みになっている首相を揶揄している。それとは別に、テレビで報道される首相を主人公一家が見る・語るという構図（1コマ）が使われている点にも留意する必要がある。⁵⁰

参考までに図18の背景について説明しておく、オバマと鳩山と福島は互いに異なる立場と力関係のなかで飛行場の移設問題にむきあっていた。まず、オバマが最高司令官を務めるアメリカ軍は、2006年の日米合意どおり沖縄「県内」への飛行場移設を求めている。他方、福島は断固として「県外・国外」を主張していた。鳩山は首相に就任する以前から「最低でも県外」と公言し、その点では福島と一致していたが、日本政府の最高責任者として、すでに県内に移設することで合意していたアメリカ側を説得しなければならなかった。こうした立場の違いに加え、3人の力関係も均一ではなかった。図18で描かれる3人の身体の大きさが示唆しているように、オバマは世界最大の軍事力をもつ大国の大統領、鳩山はアメリカ軍の助力で国防を維持している日本の首相、そして福島は民主党と連立を組むことで政権に参加している小政党の代表者である。なお、鳩山は結局、この板挟みのジレンマを解決することができなかった。2010年5月28日、飛行場を沖縄「県内」の辺野古周辺へ移設する日米合意を発表し、同日、閣議決定への署名を拒否した福島を閣僚から罷免してしまった。

図18で着目すべきもう1つの点は、他の政治家と対比・並列して首相を描くと同時に、第3のパターン、つまり非現実的な架空の舞台を設定し、そこに滑稽な人物として首相を登場させる手法も認められることである。「自分だけじゃ何もできないのいろいろなウルサイなー」（4コマ）と福島を疎ましがる鳩山がそれである。もちろん、まったく同一の不満を鳩山にぶつけているオバマもそうである。ただし、「期限は決められない」「できたら県外に移したい」「でも信じてほしい」（2コマ）は鳩山の実際の発言と合致する内容であり、この部分は必ずしもフィクションとはいいい切れない。とはいえ、架空の舞台設定で首相を滑稽に描いていることは間違いない。

フィクショナルな設定で首相を描く手法は、図18以外にも5本の作品で用いられている。先行研究が示しているように、同じ描き方は「アサッテ君」でもしばしば採用される。しかし、本論文の中編で明らかにしたように、鳩山政権時の「アサッテ君」には架空の設定で首相を描く作品はなかった。

現実にはありえない状況設定で首相を皮肉る手法は、政治批評そのものを目的とする1コマの風刺漫画と類似性があるが、この点も、「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事漫画であることを補強する特徴の1つだといえる。その典型例が2009年11月19日号（図19）の作品で、架空の首相は最後の4コマ目で描かれている。

- ・アメリカ軍基地の移設問題で苦慮する首相を伝えるテレビを見ながらカーサンが、「鳩山さん大丈夫かなー？」とトーサンに尋ねる（1～2コマ）
- ・トーサンが「大丈夫だよ」「鳩山さんならいざとなれば…」と答える（3コマ）
- ・テレビのなかの鳩山が突然、「うちの屋敷の中に基地を移設します！！」と宣言する（4コマ）
- ・吹きだし内では、飛行機が通過する下の家で鳩山と彼の妻とおぼしき女性が、「ちょっとウルサ

地球防衛家の ヒトビト

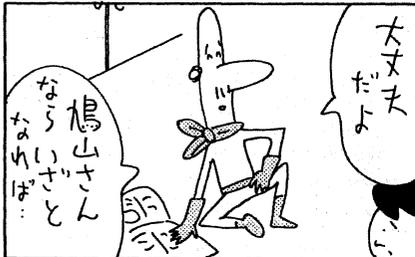
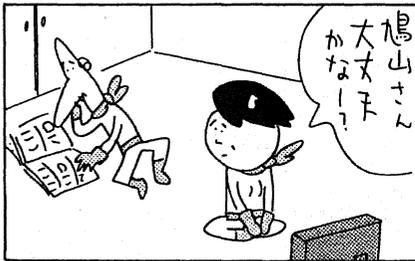


図19 2009年11月19日号

地球防衛家の ヒトビト

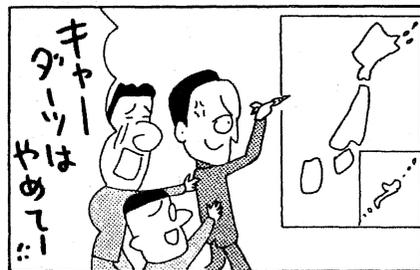
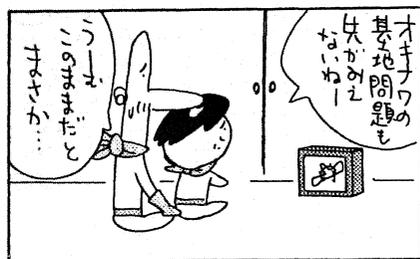


図20 2010年4月9日号

イけど…」 「平気よ」と話している (4コマ)

飛行場問題の解決に手間どっていることに加え、鳩山が高級住宅街に豪邸をもつ資産家であることを、基地を自宅内に移すという架空の出来事を描くことで皮肉っている。なお、この作品では終始、首相の姿がテレビ画面のなかに描かれていることも (1・4コマ)、本論文にとっては見過ごせぬ重

要な点である。

同じく飛行場問題を題材としながら、実際にはありえない姿の首相を1コマの風刺漫画のように描いている作品をもう一例紹介しておく。2010年4月9日号（図20）の作品がそれで、飛行場の移設先を見つけられず批判を浴びる首相が、ダーツで候補地を決めようとして秘書らしき人物らに制止される姿を滑稽に描いている。首相は3月31日の党首討論で、移設場所について「腹案」があると公言したものの、それ以後も状況をまったく打開できずにいた。自身の発言によって窮地に追いつめられる首相を、自暴自棄にダーツを投げようとする架空の姿を描くことで風刺している。

2009年11月27日号（図21）の作品にも架空の状況設定がもち込まれているが、この作品でとくに注視すべきは、作者自身のナレーションを使う第4のパターンが併用されていると解釈できる点である。まず、「お金って空中からわいてくるものじゃないのか…？」（4コマ）が架空の発言であることは一目瞭然である。これは、首相の政治資金管理団体の収支報告書に「故人」が個人献金者として記載されていたこと、また実母からの巨額の献金が記載されていなかった問題について、裕福な家庭で育った首相の金銭感覚が非常識なものであることを皮肉っている。この問題については首相自身も、「恵まれた家庭に育ったものですから、自分自身の資産管理がきわめてずさんだったことを申し訳なく思う」（11月10日）と非を認めていた。補足的に、この作品でも首相がテレビのニュースで報道される政治家（1コマ）として描かれている点は留意しておくべきである。⁵¹

同時に、図21で着目すべきもう1つの点は、「ダイジョーブか鳩山!？」（4コマ）という一言が第4の表現パターン、つまり作者自身のナレーションとしても読めるということである。確かに、それが吹きだしのなかに書かれていることを考えれば、単にテレビを見ているトーサンとカーサンの台詞、でなければテレビの報道内容と読むことも可能ではある。しかし、吹きだしの形が1コマ目のそれと違うこと、吹きだしの位置が左側であること（テレビの報道内容は1～3コマまで右側）、また4コマ目にトーサンとカーサンの姿が描かれていない事実



図21 2009年11月27日号

地球防衛家の ヒトビト

しいあがり



図22 2010年6月9日号

をふまれば、これを作者自身のナレーションにとらえることもけっして不合理ではない。

本論文があえてそのような解釈を示すのは、ナレーションによる風刺・批判が他の漫画には見られぬ「地球防衛家のヒトビト」だけの独自性であり、先行研究がこの漫画を「自己主張型」の時事的4コマ漫画と特徴づけてきた最大の理由だからである。登場人物の台詞ではなく作者自身のナレーションとして提示される文章は、漫画という形式をとってはいるが、ほとんど作者自身の意見表明と読むことができる。その意味で、ナレーションは「自己主張型」の真骨頂を示す表現手法なのである。⁵²

しかも、上述の解釈を補強する材料として、在任期間「外」ではあるが、実際にナレーションを使って鳩山を酷評している作品がある。鳩山が正式に離職した翌日の2010年6月9日号(図22)の作品がそれで、試験で30点しかとれなかった小学生らしき子供の親が「ウチの子はホメないとびないタイプで…」(3コマ)と語る場面が描かれたのち、うつむいて退場する鳩山の横に「このヒトもそうだったかもしれない…」(4コマ)という一文が書き込まれている。最後の4コマ目に登場するのが鳩山だけであること、また吹きだしが描かれていないことから、これが登場人物ではなく作者自身の言葉であることに疑問の余地はない。さまざまな問題について批判を浴びつづけた末に突如として辞任した鳩山に対し、登場人物の言葉を介さず、ほぼ直接的に政治批評をぶつけている。正式に辞職した翌日に掲載されているため本論文が定義する「首相を描いている作品」には含まれないが、「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」の時事的4コマ漫画であることを象徴する1本である。⁵³

追加的に、鳩山の在任期間中、ナレーションに近い表現方法として「カエル」が登場させる作品が1本あったことにも触れておく。作者は皮肉屋の「カエル」に自身の見解を代弁させることがあり、過去には小泉政権時に2本(2004年5月7日号、2005年3月9日号)、福田政権時に1本(2008年9月5日号)で「カエル」が登場させて首相を描いている。

2009年11月6日号(図23)の作品がそれで、一見してわかるように架空の状況設定で首相を描く手

法も使われている。「その時がきたら首相自ら判断します!!」（1コマ）と話す首相をテレビで見たカエルが、ドラムロールで「その時」にそなえる。しかし、ソファに座る首相は動きだすそぶりを見せず、「まだその時じゃないって」（4コマ）とカエルを制する。鳩山を描いた11本の作品のなかで、地球防衛家の人々がまったく登場しない作品はこの1本だけである。すでに何度か言及しているように、テレビが報道する首相をカエルが見る・語る構図が使われている点も見逃せない。なお、「その時がきたら首相自ら判断します」（1コマ）は、2009年10月29日の衆議院本会議で、沖縄の飛行場問題についての方針を問われた際の首相の答弁、もしくは11月4日の衆議院予算委員会での献金疑惑をめぐる秘書の監督責任についての答弁をさしていると思われる。

「地球防衛家のヒトビト」の首相描写を理解する上で、「カエル」の存在を軽視することはできない。なぜならば、それがしばしば登場する定番キャラクターだというばかりでなく、登場人物は「みんなボクの分身。でも、カエルが一番近いかな」と作者自身が語っているからである。つまり、「カエル」の言動は作者自身の見解をほぼそのまま代弁していると考えられ、前述したナレーションと類似した表現方法だといえるのである。この意味で、図23も「地球防衛家のヒトビト」が「自己主張型」であることを集約的に示す作品だといえる。少なくとも、作者がこの作品で決断に踏み切らない（れない）首相を風刺・批判していることは間違いない。⁵⁴

ところで、小泉以降の歴代首相のなかで鳩山がもっとも「描かれやすい」首相であったことを理解する上で、首相に就任する以前から、作者が批判的な文脈で鳩山を描いている事実は注視に値する。本論文の定義に適合する方法で首相就任以前の鳩山を描いている作品は5本もあり、しかもそのなかのいくつかには就任後の「描かれやすさ」を予感させるような批評性・風刺性が認められるからである。同じく就任以前に作品化されている首相経験者には安倍（3本）と麻生（2本）がいるが、いずれも鳩山ほど多く描かれているわけではない。「地球防衛家のヒトビト」において鳩山は、首相になる以前からすでに「描かれやすい」政治家であったことがわかる。⁵⁵

地球防衛家のヒトビト （いんげん） いんげん しいんげん

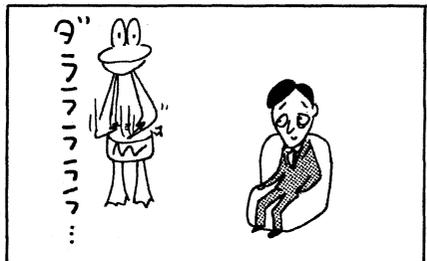
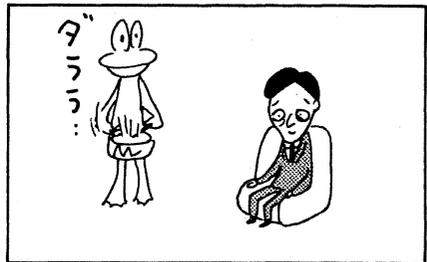
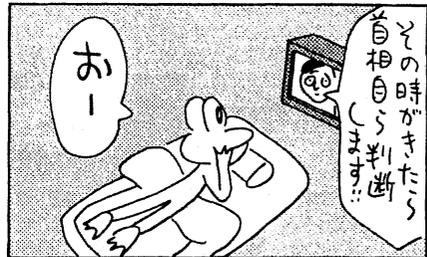


図23 2009年11月6日号

地球防衛家の ヒトビト

いあがり真

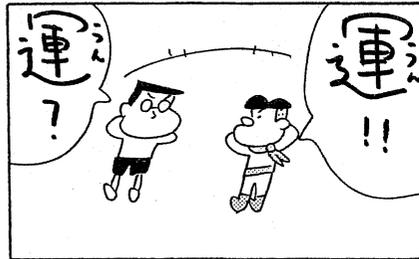
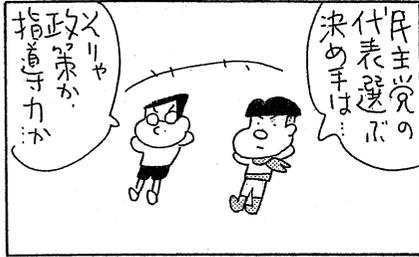


図24 2009年5月15日号

地球防衛家の ヒトビト

いあがり真



図25 2009年7月3日号

就任以前の鳩山を描いている5本のなかで、とくに「地球防衛家のヒトビト」らしい人物描写が見られる例として、2009年5月15日号(図24)と7月3日号(図25)の作品を紹介しておく。まず、民主党の代表選を題材としている図24では、地球防衛家の面々に批判的に語らせるパターン1、他の政治家(党副代表の岡田克也)と対比・並列して描くパターン2、そして架空の状況設定で滑稽に描く

パターン3が併用されている。「子供」の視点が活用されている点も見逃せない。鳩山の献金疑惑を扱っている図25でも、登場人物に批判的に語らせるパターン1、および架空の姿を滑稽に描くパターン3が使われている。政治資金の献金者に「故人」が記載されていた問題は2009年11月27日号（図21）の作品でも取りあげられているが、「地球防衛家のヒトビト」では就任以前から作品の題材とされていたわけである。いずれにせよ、鳩山は就任した途端に「描かれやすい」首相になったわけではなく、それ以前から作者の気を引く存在であったことがわかる。⁵⁶

上の2本をはじめとする就任以前の作品は、本論文だけでなく後続の研究にとっても無視できない意味をもっている。鳩山に限らず4コマ漫画の首相描写を十全に理解するためには、その首相の在任期間中だけを見ているのでは不十分で、就任以前にさかのぼる連続的な流れを把握する必要があることを示すからである。とくに最大野党の党首として政権交代をなし遂げた鳩山の場合は、首相に就任したこと自体が、それ以前の自民党の政治家による政権運営をふまえて生じた現象であるがゆえに、より長い時間枠のなかで理解する必要がある。同じことは本論文の中編で「アサッテ君」を分析した際にも指摘した。今後の研究では、とくに政治家や政治問題を頻繁に扱う時事的4コマ漫画を分析する上で、首相就任以前の作品は見落とすことのできない重要な分析対象となるはずである。事例によっては、離職後の描かれ方にまで目を配る必要もでてくるかもしれない。⁵⁷

上述の点に関連して、3大全国紙の4コマ漫画では唯一、「地球防衛家のヒトビト」だけが「次期」首相である菅直人を鳩山の在任期間中に描いている事実にも再度、言及しておく。すでに紹介した図15と図17がそれで、将来、菅を事例とする研究がなされる際には必ず分析に含めるべき作品である。

（「地球防衛家のヒトビト」の分析のつづきは本誌次号に掲載する予定である。）

43 「新連載マンガ『地球防衛家のヒトビト』 来月1日から『朝日新聞』2002年3月25日夕刊。

44 「地球防衛家のヒトビト 笑って憂えて10年」『朝日新聞』2012年3月27日夕刊。

45 しりあがりの経歴については、「シリーズ人間 不安だから 怖いから『未来』が描ける」『女性自身』2011年12月27日号：62～68が詳しい。

46 鳩山を描いた11本は、以下の号に掲載されている。2009年9月30日号、2009年10月29日号、2009年11月6日号、2009年11月19日号、2009年11月27日号、2009年12月8日号、2009年12月10日号、2010年2月6日号、2010年4月9日号、2010年6月5日号、2010年6月7日号。

47 「地球防衛家のヒトビト」における鳩山の「描かれやすさ」を説明する上で、単純に鳩山の外見が「描きやすい」ことを一因とすることは、あながち荒唐無稽ではない。なぜならば、安倍晋三（第1次）の辞任表明から3日後の2007年9月15日号の作品で、「次の首相」は「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と願う「某漫画家」が描かれているからである。この「某漫画家」が作者自身であることに疑問の余地はない。しかし、外見による「描きやすさ」はすぐれて主観的な要素であるため、論理性・実証性を十分にもった説明をするためには、上の作品だけでは明らかに材料不足である。「地球防衛家のヒトビト」で使用されているシンボルを見ても、画像（似顔絵）のみ＝6本、文字のみ＝2本、画像と文字（併用）＝3本で、画像ばかりを極端に多用しているわけではない。シンボルについては、本誌次号に掲載する予定の結論であらためて詳説する。

参考までに、「ののちゃん」の作者のいしいひさいちも、「政治家で描きやすかった人、描きにくかった人はありますか」という問いに対して、「似顔がうまく作れるかどうかがかぎで御本人がおもしろい人であるか、

漫画になりやすいかなどは実はあまり重要ではありません」と答えている。(いしいひさいち「でっちゃんインタビュー いしいひさいちに聞く」、いしいひさいちほか、新保信長・穴沢優子編『文藝別冊 [総特集] いしいひさいち 仁義なきお笑い』[河出書房新社、2012年]、25。)

- 48 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』(岩波新書、2009年)、174。
- 49 図17以外にも、鳩山の在任期間中に過去の首相経験者を描いた作品がもう1本ある。2010年6月2日号の作品がそれで、鳩山自身は登場しないが、鳩山が福島瑞穂(消費者・少子化担当相)を罷免したことを「結婚詐欺のようなもの」批判した安倍晋三がその発言とともに描かれている。
- 50 もう1本、2009年9月30日号の作品でも他の政治家と対比・並列して首相を描く手法が使われている。ここでは、銀行からの借金返済を猶予する措置(モラトリアム)を提案する亀井静香(金融・郵政改革担当相)とその提案に当惑する鳩山が描かれている。国民新党の党代表である亀井は、モラトリアムは連立を組む3党の合意に含まれると主張したが、首相の認識とは食い違っていた。政権発足早々から連立相手の閣僚にふり回される首相を揶揄している。
- 51 「鳩山由紀夫首相・語録」『朝日新聞』2010年6月3日。
- 52 もっとも、間違いなくナレーションを使って首相を風刺・批評していると断言できる作品は「地球防衛家のヒトビト」でさえも非常にまれで、過去には小泉・安倍・麻生の在任期間中にそれぞれ1本ずつ(2005年10月20日号、2007年9月13日号、2009年7月22日号)、合計で3本しかない。
- 53 同じく本論文が定義する「首相を描いている作品」とはいえないが、2010年5月10日号の作品も普天間飛行場問題に対する首相の対応を、以下のようにナレーションを使って風刺している。ムスコが「大丈夫 大丈夫 自分でできる!!」と靴ひもを自力で結ぼうとするが、結局「あーん、ダメだー こんがらがっちゃったー」とあきらめる。トーサンが困り顔で「やる気はわかるんだけど こここまでこんがらがるとはなー」とつぶやく。最後の4コマ目で「なんだか似てないか?」「沖縄の基地問題……」というナレーションが示されて終わる。
- 54 河合真帆「しりあがり寿さん『僕の分身』 連載『地球防衛家のヒトビト』本に」『朝日新聞』2004年6月22日。
- 55 首相就任以前に鳩山を描いた5本は、以下の号に掲載されている。2009年5月15日号、2009年5月20日号、2009年7月3日号、2009年9月9日号、2009年9月11日号。
- 56 就任前に鳩山を描いた他の3本の内容を簡潔に紹介すると、2009年5月20日号は民主党の高い支持率を喜ぶ架空の姿、2009年9月9日号は温室効果ガスの排出削減を訴える姿をテレビで報道される鳩山、そして2009年9月11日号は首相に就任する予定であることをテレビで報道される鳩山をそれぞれ描いている。
- 57 本論文執筆時点(2013年11月)で、首相辞任後に鳩山を描いている作品は図22以外にも2本(2011年6月7日号、2011年9月2日号)ある。2011年6月7日号の作品では、東日本大震災の対応に「一定のめど」がついた時点で辞任すると表明しながら早期の辞任を否定する発言をした菅首相に対し、鳩山が「ベテナー」という言葉を使って強く批判したことが題材とされている。この作品では菅首相も描かれているため、今後の研究で分析対象とする予定である。2011年9月2日号の作品は、「ねー、うし、とら」「うー、たつ、みー」につづき、「アベ、フクダ、アソウ」「ハトヤマ、カン、ノダ」ととなえるムスコに、カーサンが「十二支と総理をいっしょにするんじゃないよ」と注意する、という内容である。菅の辞任により、安倍晋三以降5人連続して1年ほどで首相が交代する事態になったことを風刺している。もちろん、この作品も今後の研究で分析に含めるつもりである。

【Abstract】

Prime Minister Yukio Hatoyama in Newspaper Comic Strips (Part 4):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2009–2010

Takeya MIZUNO and Tomomi FUKUDA

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Yukio Hatoyama during his tenure, from September 16, 2009 to June 8, 2010.

As the fourth installment of a five-part series, this article analyzes qualitatively how *Asahi's* “Chikyu Boei Ke no Hitobito” (The Earth-Saver Family) depicted Prime Minister Hatoyama.